

スクールカウンセラーだより 3

いつの間にか田植えが終わり、元気なカエルの鳴き声が聞こえるようになりました。運動会などコロナで出来なかった行事も行えるようになりました。少しずつですが日常を取り戻してきたかなと思います。

友だち同士のちょっとした気遣い

以前、小学校の担任をしていたときに、「隣の1m」という話をしました。廊下掃除のときに、隣のクラスの境界線の1m先まで掃除をしようという事です。ちょっとしたおせっかいかもかもしれませんが、境目を意識した掃除だと結果として隣との間に筋が入ってしまいます。ちょっと1m先までやってみると、隣との境目は無くなり、お互いに綺麗になります。

但し、やり過ぎてしまうと余計なお世話にもなってしまいかもしれません。そこが難しいところですが、「心づかい」とか「心つくし」という言葉があるように、相手へのちょっとした気づかいが、人との距離を縮めることにもつながるように思います。希薄になりつつある人間関係、ちょっとした気づかいで友達関係も良くなるかもしれませんね。

共感と否定

子どもが自分の意見を言ったときに、どのような意見でも、まずは共感することから入るか、違いを指摘することから入るかは大きな違いが生まれると思います。

「他にない？」という形で最初の意見を否定してしまうか、「付け足すことはないかな？」という言葉で、最初の意見を受け入れたうえで、もう一度考えてみることを促すかです。

「他にない？」は、子どもによっては自分の意見は間違っていたのかなという思いにもつながり、自信を失う事になるかもしれません。逆に「付け足すことはないかな？」という言葉は、まずは自分の思いを大切にされ、受け入れられたという思いと、もっと他にあるかもしれないと、考えに広がりを持たせることも期待できます。

子どもの意見にどのように返していくかによって、子どもに自信を失わせるか、自信を持って他の意見を考える事ができるかが変わってくると思います。それは、自分と違った考え方も大切にできる子どもに育てていく事にもつながっていくようにも思います。

子どもへのサポートの仕方の違い

ある障がいに関する話で、「障がいがあっても元気に頑張っている子どもたちは沢山います。でも、頑張ってもうまくいかない事もあります。だからこそ、ときにはしっかりと手を貸してあげ、できたという思いにつなげることが大切です。」という事を聞きました。

障害の有無にかかわらず、子どもへのサポートの仕方は様々です。積極的に手を貸してあげることもありますし、やり方の見本を見せることだけで大丈夫な子もいます。また、後ろから見守るという方法でサポートする方法もあるかもしれません。そのサポートの違いを、「特別扱い」という人もいるかもしれません。でも、それぞれの違いを理解して支えあることが大切だと考えます。みんなが「特別」になれば良いだけだと思います。「みんな平等」というのは、みんなに同じように力を貸すという事ではなく、それぞれに合った力を貸すという事だと思います。ですから、みんな

なの違いを理解し、それぞれに合った特別なサポートというスタンスが必要だと思います。子どもたちにも、それぞれの違いを話し、みんなが大切な一人であることを伝えていきたいと思えます。

思春期の心

小学校高学年ぐらいから思春期に入り、子どもたちは今までとは大きく成長していきます。でも、その成長に合わせて様々な悩みも出てきます。それを少し考えてみます。

- ・ 思春期は自分を客観的に見る心が現れ、自分とは何か、自分は何のためにいるのと自問するようなことが増えてきます。自分らしさを考える時期ですが、それはとても大切な事です。但し、思っていた自分と、思うようにいかない自分があり、その分、悩みも増えてきます。親としてできることは、見守ることがポイントだと思いますが、ときには親としての思いをもとにしっかりとアドバイスをしてあげることも必要になります。
- ・ 考え方が広がり、親や大人に対しても客観的な目を持つようになります。また社会の矛盾を指摘するようになります。それは社会の中で生きていくための判断力を高めていく事にもつながっていきます。そのため、子どもの考え方を大切にしながらも、大人としてはこう考えるというような会話も大切になってくる時期だと思います。
- ・ ときには親との外出や会話を拒絶することもあります。そのかわり交友関係が広がり、親よりも友達との関係が大切になってきます。それは自立心の現われです。親としては少し寂しいかもしれませんが、子どもだけの時間も大切にしたい時期です。
- ・ 自立したいという思いから、親から干渉されたり、詮索されることを嫌がる時期ですが、実は孤独であることも多いのです。上手く仲間ができない、何をしても自分の思うようにいかない、自分の思いを理解されない、など様々な事から、誰もいないところで涙を流している子も少なくありません。ゆっくりとした時間の中で、いろいろな話ができるとうれしいかもしれません。

お手伝いについてももう一度考えます。

いつもお手伝いをさせてくださいと言っていますが、アメリカ等との比較で考えると、日本の子どもは、家庭内での役割を持っている子が少なく、その為「家庭で役に立っている」という自覚が少なく、自分の存在が誰かのためになっているという意識が低いようです。その為、結果として「自分を大切思う」という思いが低くなっているようです。

お手伝いは、家庭内での役割をこなすという事で、家族の一員という意識や、家族や仲間をしっかり見守られているという意識が育ち、自分はみんなにとって大切な存在という意識が芽生えてきます。

「面倒くさい」と子どもは言うかもしれませんが、でも、やらせてしっかり認めていく事が自分を大切に思えるようになる一歩だと思います。 _